書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

安楽の門

大川周明 著

SAMPLE
Shoshi-Shi

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

凡例

一、本書は昭和二十六（一九五一）年刊行の大川周明著『安楽の門』（出雲書房）を底本とし版を新たに組んだものである。底本の記述をそのままに保存し後代に継承することをむねとして、左記のような方針で印刷した。

一、仮名遣いは誤ったものも含めすべて元本のままとし、漢字は現行の字体で表記した。片仮名語で拗音促音の小文字表記がされている場合があるが、これも元本そのままに表記したものである。つまり本書の記述は、送り仮名の不統一、誤植などを含め、漢字の字体以外はすべて原本の通りになっている。また、引用部分の字下げのありなしも元本に従った。目次のみは本文と齟齬のある場合、本文にあわせて訂正した。

一、文字の右側の読み仮名ルビは元本にあるものであり、いらずもがなと言えるものもそのまま全て再現した。文字の左側の読み仮名ルビは本書刊行所が補ったものである。元本の読み仮名ルビが明らかに間違っている場合（仮名遣いを除く）の訂正は、左側に正しいものを補って示した。

一、誤りであるが特に訂正せずともわかるものについては「（ママ）」とルビ書きした。前述のように、誤った仮名遣いも元本のままに表記してあるが、これには一々「（ママ）」とルビ書きはしていない。

一、行内に二行割で補った註釈や読み仮名や誤植の指摘などは本書刊行所によるものである。ただし二七二ページのサイズの大きい二行割註釈は元本にあるものである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序

SAMPLE
Shoshi-Sh m

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

『安楽の門』とは宗教のことである。この小著は私の宗教的生活の回顧であり、その執筆の由来は下の通りである。

一昨年の夏、友人島一郎君が『世界春秋』といふ月刊雑誌を創め、私にも寄稿を求めて来た。私は友人としての義理を果たすために島君の求めに応じた。そして偶々宗教問題について深い関心を抱いて居た時だつたので、物ごころついてからの私の宗教的経験を回想しながら、出来るだけ具体的に私の宗教観を表白しようと思ひ立ち、十回前後に亘つて毎月連載するつもりで、まづ全体の序言にも当る三回分を一気に書き上げた。そして初めの二回分だけは雑誌に発表されたが、戦後に簇出した諸雑誌の例に洩れず、島君の『世界春秋』も半年ならずして廃刊となつたので、自然私もまた筆を抛つことになつた。

然るに私が裁判から釈放されて帰村して以来、私の顔さへ見れば個人雑誌を出せの、何か本を書けのと強請し続けて止まなかつた福永重勝君が、今度は『安楽の門』の続稿を際限なく催促し初めた。私は幾たびか之を断はつたが、ついに福永君の根気に打負かされ、どうせ書き出したことであれば、とにかく纏めて見ることにしようといふ気にな

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

つた。そして気の向くに任せて稿を続け、想ひ起すまま、念頭に浮び来るまま、長い蹬（とう）蹌（そう）（足場を失ってよろめくさま。勢いを失ってさまようさま）の跡を辿つて、思ふがままに道草を食ひながら、十二章まで書いて一応の段落をつけた。かやうにして此の小著は、友人への義理から書き初め、友人の懇情にほだされて書き終へたので、回顧録とも随想録ともつかぬ閑（かん）文字である。

昭和二十六年六月

大川周明

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

安楽の門　目次

一　人間は獄中でも安楽に暮らせる　15

幸福と快楽は同義語　何うすればいつも安楽に暮らせるか　病気と精神力
河上博士の獄中記　「凡人伝」執筆の市ヶ谷時代　豊多摩時代と近世欧羅巴植民史　巣鴨時代　「太古の民」Ohkawa shall die　最后の召集令　松井石根将軍と同房　興亜観音の礼拝　観音経の読誦　漢詩の興趣

二　人間は精神病院でも安楽に暮らせる　35

白日夢の解消　精神鑑定　裁判除外　病室を書斎に「古蘭」の訳註　沼並武夫君　清水常治郎君夫妻の好意　見えざる力　岩崎徹太郎君の精神の糧　天然人石黒一郎君

三　私は何うして安楽に暮らして来たか　63

人心の険奇、人情の反覆　佐田弘治郎君の友情　性の善なるを信ぜよ　求むるところなき心　頭山満翁　押川方義先生　八代六郎大将　大西郷と母「斯禹伝序」　真夏の日本海の入日　日蓮信者石原莞爾将軍の心境　「魔王」北一輝君の面目

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

四　私は何うして大学の哲学科に入つたか　83
母を念ずることが私の宗教　老友山口白雲君の文　泉鏡花先生の宗教的情緒　七里恒順和尚と盗人　悲母教　ハンガリー大統領　色則是空、空則是色　「基督のまねび」

五　私は大学時代に何を勉強したか　103
真実の宗教を求めて　カントの主意的　ヘーゲルの主知的　シュライエルマッヘルの主情的　テイーレ（宗教とは神と人との関係なり）　仏とは何だらぼうし柿のたね　ブセット　マクスミュラー

六　押川方義先生と八代六郎大将　127
松村介石先生の道会　天来の声　出来損ひの傑作　村井知至先生　温乎玉の風格　豪放磊落　列聖伝の論評　日本史に対する関心

七　印度人追放と頭山満翁　151
ヘーラムバ・L・グプタ君　B・N・タゴール　ララ・ラージパト・ライ氏　歓迎会　日印親善　謂わゆる腹の人頭山翁　「大風の吹いた跡」の同翁　山鹿素行　横井小楠

SAMPLE
Shoshi-Shiisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

八　東洋の道と南洲翁遺訓　173
Religionの訳語　宗教、道徳、政治の一体化　印度の教法　G・W・ノックスの言　西洋に於ける宗教、道徳、政治の分化　太子伝補註の一節　南洲翁遺訓　大西郷と荘内藩の関係　大西郷と茶銘

九　人間を人間たらしめる三つの感情　193
感覚人の本質　鼻欠猿の話　「千人の諾々は一士の諤々に如かず」　本当の人間　分霊　羞恥の感情　愛憐の感情　敬畏信頼の感情

一〇　克己・愛人・敬天　215
地に対する道克己　人に対する道愛人　天に対する道敬天　自然的欲求の精神化　大西郷の恬淡　美田を残さず借金も残さず　不品行なる善人　呪物崇拝

一一　既成宗教と『宗教』　241
仏教と基督教　「宗教の真諦」　貝原益軒の「天地を以て大父母とす」　フレムミヒカイト　唯一無上

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

一二　不可思議なる安楽の門　259

非宗教的人文要素　宗教とは人間が有難い生命の本質に復ること　人の子の自然の感応　小児のような従順　法性法身とは信心そのもの　宗教とは無限の生命に連ること

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

安楽の門

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

一　人間は獄中でも安楽に暮らせる

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

人間は何うすれば安楽に暮らせるか。私はこの問題に答へようとするのである。いや、幸福に暮らせるというよりは、安楽に暮らせると言つた方がよい。それは幸福という言葉の意味が漠然として捉へ難いからである。世間一般では、幸福とは期待が実現され、欲求が満足された時の状態を指して居る。従つて幸福は殆ど快楽と同義語となる。現にジョン・スチュアート・ミルは、幸福とは快楽即ち苦痛を感じないこと、不幸とは苦痛即ち快楽を感じないことだと言つて居る。して見れば、男女飲食の欲を満たすのも幸福、名誉権力の欲を満たすのも幸福、画家が会心の絵を描くのも幸福で、各人の欲求が異なるに従ひ、其人の感ずる快楽即ち幸福も、また自ら違つて来る。

もつとも昔のギリシヤでは、幸福と快楽とは別々の言葉であつた。アリストテレスは、幸福とは人間がその最も秀でた性質に従つて、凡ての機能を存分に活動させることだと説いて居る。そしてアリストテレスに従へば、人間の最も秀でた性質とは理性のことであるから、幸福とは理性に従つて人間の機能を活動させることで、詮ずるところ心身の健全な生活そのものを指して居るのだから、快楽又は快感とは区別せらるべきものである。それでもアリストテレスは、富貴・栄達・子孫繁昌などは、設ひ真の幸福ではない

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

としても、その装飾であると言つて居る。

いま私が解こうとする問題は、人間は何うすればその欲求を満足させることが出来るか、富貴になりたい人は何うすれば富貴になれるか、子孫繁昌を望む人は何うすれば立派な子供を生むことが出来るかといふやうなことではない。第一私自身が、富貴栄達や子孫繁昌などとは凡そ縁遠い人間であるから、その私が立身出世の道を説いても、恐らく耳を傾ける人はなからう。若しまた私が立身出世の道をわきまへて居たなら、之を他人に伝授する前に、まづ自分自身で之を実地に応用し、まんまと黄金と権力を両手に握つて、世間から羨まれたり憎まれたりして居ることであらう。私は遅れ馳せに新興宗教の教祖たちの仲間入りをして、謂はば御利益の店開きをしようといふのでない。私が答へようとするのは、人間が貧富貴賤を問はず、短命長寿を問はず、順境逆境を問はず、何うすれば安楽に暮らせるかということである。私は自分自身の生涯を顧みて、甚だ安楽に暮らして来たことを欣ぶ。私の永年の行路は、必ずしも平坦砥の如きものであつたとは言へない。それにも拘らず私は、常に心の底に安んずるところあつたために、無事長程を踏破して、今日なほ安楽に歩み続けて居る。私は、何が私にこの安楽を与へたか

SAMPLE
Shohi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

を省みながら、ひとり私のみならず、人間は何うすれば安楽に暮らせるかを知らうとするのである。

さて世の中で一番つらいものは貧と病と言はれて居る。私は切実に貧苦に悩んだことがないから、貧乏の本当の辛らさは知らない。但し貧乏とは衣食住の欠乏を指すものとすれば、刑務所で柿色の着物を着て、狭い部屋で三度々々まづい食物で暮したことがあるから、貧乏に彷彿した味を知らぬわけでもない。併し之は貧苦の真実の経験ではなく、謂はば模擬経験である。但し私も病気は人並に経験して来た。元来私の体格は、身長だけが抜群に高いだけで、骨組は極めて粗末であるから、之を建物に譬へて言へば紛れもなく長屋普請である。それ故に肺結核を初めとし、産科婦人科以外の病気には殆ど罹らぬものがない。しまいには世間周知のやうに精神病までわづらつて、アメリカ病院・東大病院・松沢病院を転々した。東大病院の精神病科の私の主治医は、或る雑誌に私の脳細胞が尽く破壊し去られたかのやうに発表して居る。これは私の精神病が決して治らぬものと確信したからのことであらう。若し私が再び尋常の人間に復り得ると思つて居た

SAMPLE
ShoshiSinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ら、あのやうな発表は慎んだに相違ない。之を読んだ人々は、もはや私は生ける屍となりはてたものと信じたであらう。然るに私の肺結核が、何の養生もせず、全く薬を服まずに何時の間にか愈つたやうに、私の精神病も知らぬ間に治つて了つた。脳細胞が破壊されたと診断され、精神病院に癈人として監禁されて居る間に、私は極めて難解な回教の経典古蘭の飜訳を、松沢病院の病棟内で完了した。松沢病院の医師諸君の中には、私が朝から晩まで机に向つて、せつせと筆を運んで居るのを見、また午前一回、午後一回、寒暑を厭はぬ判で捺したやうな私の散歩を見、読書・執筆・散歩の外に何の屈託もなさそうな私を見て、恐らく之は病気がさせる器械的行動だと考へた人もあつたであらう。かやうに私は病気の方では人並又は人並以上の経験がある。従つて病気による生理的苦痛は味はつたが、精神的不安や煩悶が之に伴はなかつた。

私は貧苦の生活経験がない代りに、三度刑務所に入つた。最初は未決で市ケ谷刑務所に一年有余、二度目は既決囚として豊多摩に一年半余、三度目は巣鴨に約半年である。先頃私は河上博士の自叙伝（河上肇著『自叙伝』）を読んだが、この正直な老学者は、実に感傷的な

SAMPLE
Shohi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

附録　大川周明について

＊以下は参考資料として、大塚健洋著『大川周明』（中公新書版）の記述などに依り大川周明の生涯を素描したものである。

一八八六（明治十九）年十二月六日、山形県飽海郡荒瀬郷藤塚村に生まれる。父は周賢、母は多代女。大川家は代々医師を家業とし、父は眼科医であった。子供のころから長身であったが、成人しての体格は身長一七九センチほどで、体重は六四キロほどであったと伝えられている。

荘内中学校時代には、家業の継承という父の期待に反して、教育者となることをめざし、勘当同然となったという。中学三年の時より鶴岡天主公教会のマトン神父からフランス語を学んだ。また中学生にして『週刊平民新聞』を購読していた。

一九〇四（明治三十七）年、三月に荘内中学を卒業し、東京で受験勉強ののち九月に熊本の第五高等学校第一部文科に入学。同校では『週刊平民新聞』の影響強い社会主義者として名を知られたという。

一九〇七（明治四十）年、七月に五高を卒業、九月に東京帝国大学文科大学へ進学、宗教学科で学んだ。大学での勉強と並行して、松村介石の日本教会（儒教とキリスト教の混淆宗教）に関わり、機関誌『道』の編集を手伝うなどし、同誌に論文も載せた。同会には、その後一九一〇（明治四十三）年になって正式に入会。なお同会の思想的展開がキリスト教の教義と相容れなくなったところで、同会は「道会」と改称した。

一九一一（明治四十四）年、七月、東京帝国大学文科大学を卒業（宗教学専攻）。卒業論文は「竜樹研究序論」と題するものであった。卒業後は中学校の英語教師をしながら大学の図書館に通いつめて宗教学研究、特にイスラームの研究に努めたという。なお、大川は晩年にはコーランの翻訳もしているが、ハ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ディースの翻訳を『道』第七五～七七号に寄稿していた。参謀本部のドイツ語翻訳などで生活費を稼ぎながら宗教の学問を深める生活であった。

一九一二（明治四十五）年、松村介石の依頼で歴代天皇の伝記編集の仕事に携わるが、その過程で日本史への関心を高め、日本精神に覚醒することとなり、また、一九一三（大正二）年にはヘンリー・コットンの『新インド』（New India or India in Transition）を読んでイギリス統治下のインドの惨状を知り、西洋植民地主義が引き起こしてきたアジア問題にも覚醒した。そしてインド人の革命家たちと接触するようになり、一九一五（大正四）年には、日本に逃れてきたインド人の独立運動家グプタと出会い、イギリス政府の要請による日本退去命令を受けて追い詰められていたグプタを保護した。一九一六（大正五）年、ノーベル文学賞受賞者タゴールの来日に際しては『印度に於ける国民的運動の現状及び其の由来』を出版し、当代インドの状況の紹介につとめ、また全亜細亜会を結成してインド独立運動を支援した。

一九一八（大正七）年、イスラーム研究や植民政策に関する研究を認められ、満鉄東亜経済調査局に入る。翌年、東亜経済調査局の正式の職員となって編輯課長となる。研究テーマとして「特許会社の研究」を選び、その成果である論文「特許植民会社制度の研究」で一九二六（大正十五）年に法学博士の学位を取得している（審査員は吉野作造、河津暹、松波仁一郎）。同書はその翌年に出版された。

一九一八（大正七）年、満川亀太郎らの老壮会に参加。同会は老若男女、政治的立場も様々な人たちの座談の集まりといったものであったが、同会に属する急進派により、一九一九（大正八）年、猶存（ゆうぞん）社が結成され、大川もこれに参加した。実践的な改造案を欠き、それを求めていた猶存社は、その点において頼れる人物は北一輝であると考え、大川が猶存社を代表して上海にいる北一輝を訪ねたところ、折から「国家改造案原理大綱」を執筆中の北と大いに意見が一致し、北は帰国して猶存社に加入することとなった。猶存社は機関誌『雄叫び』を発行。

一九一九（大正八）年から一年ほどポール・リシャール夫妻と同居生活。ポール・リシャールには一九一六

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

（大正五）年に出会っている。哲学的詩人とでも言うべきフランス人のリシャールは、西洋文明の行き詰まりを警告し、新たな精神文化の創造を志していた。リシャールの妻は、トルコ人銀行家の娘ミラ・アルファッサである。リシャール夫妻は当初日本に数ヶ月の滞在予定で来日したが、日本に魅力を感じて、その滞在は四年に及んだという。リシャールは大川の依頼で『告日本国』を創作し、大川は同書をはじめ、リシャールの著作を翻訳出版した。

一九二〇（大正九）年、拓殖大学教授となる。

一九二二（大正十一）年、『復興亜細亜の諸問題』を出版。同書は大川のアジア問題に関する主著と目されている。

一九二三（大正十二）年、新生ソヴィエト・ロシア承認交渉のためにヨッフェが後藤新平の招きで来日するが、このヨッフェ来日をめぐって、ソヴィエト・ロシアの承認要求を非とする北一輝と、これを是とする大川・満川の間に亀裂が深まり、猶存社は解散するに至った。

一九二五（大正十四）年、行地社を結成。行地社は国家改造の実行機関ではなく、有識者層の啓蒙を志向した結社で、「維新日本の建設、国民的理想の確立、精神生活における自由の実現、政治生活における平等の実現、経済生活における友愛の実現、有色民族の解放、世界の道義的統一」を綱領としていた。機関誌として『月刊日本』を発行。

この年、安田共済事件で北一輝と決定的に袂を分かつこととなった。この頃から軍との接触が深まるようになる。この年に広瀬兼子と結婚。

一九二九（昭和四）年、財団法人東亜経済調査局理事長となる。

一九三〇（昭和五）年、軍に対する働きかけがさらに深まり、陸軍大学校での日本精神研究講義や、海軍大学校ほか各地の海軍施設を巡っての講演活動を行なった。折しもロンドン海軍軍縮条約を受けて軍部内に国家改造の機運が高まっている時期であった。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

一九三一（昭和六）年、参謀本部ロシア班長橋本欣五郎らとクーデターを企てる（三月事件と十月事件の二度）。

一九三二（昭和七）年、国家改造の実行団体神武会を結成するが、ほどなく五・一五事件により逮捕される。一九三四（昭和九）年の東京地裁、東京控訴院判決を経て、一九三五（昭和十）年の大審院判決で禁錮五年の刑が確定し、一九三六（昭和十一）年六月、下獄。獄中で『近世欧羅巴植民史（一）』の執筆を完成、同書は一九四一（昭和十六）年に出版。

一九三七（昭和十二）年十月、釈放運動が功を奏して仮出所。

一九三八（昭和十三）年、法政大学大陸部長となる。また、東亜経済調査局付属研究所（大川塾）を開設して所長となる。この研究所は南アジア地域の専門家養成のために全国から青年を選抜し全寮制の教育を行なうものであった。この年から、日中戦争終結のための対米工作を行なうが、結局失敗に終る。

一九三九（昭和十四）年、『日本二千六百年史』を出版。同書はベストセラーとなるとともに不敬問題を惹起し、多くの箇所で改訂を余儀なくされた。

一九四一（昭和十六）年、太平洋戦争開戦をうけて、「米英東亜侵略史」の連続ラジオ講演を行ない、翌年出版。

一九四二（昭和十七）年、『回教概論』を出版。

一九四三（昭和十八）年、『大東亜秩序建設』を出版し、「大東亜」の範囲を示すとともに「大東亜秩序」の歴史的根拠を示した。

一九四五（昭和二十）年、A級戦犯容疑で逮捕。思想犯と見なされて尋問を受け、「日本軍国主義のブレイン・トラスト」と報告され、極東国際軍事裁判の被告に選ばれた。

一九四六（昭和二十一）年、極東国際軍事裁判A級戦犯容疑者二十八名のうちただ一人の民間人として第一回公判廷に出るが、その姿はパジャマに下駄履き、起訴状朗読中に鼻水を垂らして合掌したり、パジャ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マの胸元をはだけるなどし、ついには東条英機の頭を叩くという異常行動のため、精神鑑定を要するとして退廷を命じられ、入院させられた（脳梅毒によるその症状は開廷の前から現れていた）。翌年、医学上の鑑定書に基づき、裁判所は大川を裁判から除外した。その時期の大川の日記には「ちやんと予が自ら弁護する能力のあることを認めて居るのに、裁判長は医師の診断によつて除外すると言つて居るのだ」との記載がある。医学上の鑑定では、身心の健康状態は著しく改善しているものの未だ幻覚や妄想症状は残っており、裁判上の諸能力を欠いているとされた。入院中に三十年来の宿願であったコーランの翻訳を完成させ、のち一九五〇（昭和二十五）年に『古蘭』として出版した。

一九四八（昭和二十三）年十一月十二日、極東国際軍事裁判の最終判決が下され、十二月二十三日、七名の死刑執行。大川は起訴の理由なしとのことで釈放となり退院した。

一九五一（昭和二十六）年、『安楽の門』を出版。敗戦後の大川の歴史認識は、「天照開闢の道」と題した文章（書肆心水刊行「敗戦後」所収）に見られるように、「『大日本帝国』は亡んだけれど、日本民族は滅びない。吾々は神武建国以前に溯り、天照開闢の本原に復帰して建国の第一歩を踏み出さねばならぬ。」「吾々はこの独立せる精神により、万世に太平を開くための具体的理想を確立して、新しい瑞穂国建立の土台固めを、先ず日本の農村に築き上げたい。私は天照開闢の道から再出発することが、日本再建の最も正しい且つ最も効果的な道であると信ずる」というものであった。国家の土台である衣食住をしっかりとしたものにするためには農村復興から始めなければならないという考えで、一九五三（昭和二十八）年から農村再建を期した行脚を始め、山形、福島、宮城、山梨、群馬、岩手、長野、茨城、新潟、千葉の各県を巡って農法の改善に努めた。

一九五七（昭和三十二）年、老体で農村行脚の無理を重ねるうち、三月頃にはほとんど失明状態となる。気管支炎が悪化し病床に就き、十二月二十四日、心臓衰弱のため、神奈川県愛甲郡愛川町中津の自宅にて死去。

（作成・書肆心水）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com